

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2012年(平成24年)9月16日 日曜日

無料

第4号

毎月発行

創刊 2012年(平成24年)9月16日 日曜日

《東北復興を実現する政治家》を目指そう!

国民は、国政でも地方政治でも、直接的に政治決断に関わることはできない。結果、選挙により選出した代表に政治決断を付託することになる。しかしその付託に、政治家や各政党が応えることができない状態がずっと続いている。時の経過とともに、国民の不満は大きくなるばかりである。この先も同じような状況が続いたら日本はどうなるのだろうか。街なかの声も怒りを通り越して、あ

【復興実現党】設立のすすめ

政治家に立候補する際、東北の復興を目指すという明確な目標があるならば、志を同じくする者が集まり、「党」を創って立候補する方が効率は良い。

しかし、「党」を創るのは素人には無理と思うかもしれない。が、細かな手続はあるが、素人でもできる。

正式な「政党」と認められるのは、国会議員が五名以上、または国政選挙で二%以上の得票が必要で、「日本維新の会」のように現職の国会議員が五名以上参画するようなどがなければ、いきなりの「政党」は無理である。

ではどうするか。「政治団体」を創り届け出れば良い。「政党」より活動は制限されるが立候補には問題ない。

また最近のメディアでは、国政ばかりが取上げられているが、地方政治も非常に重要である。特に東北復興に関して、各地域の合意形成がなかなかまとまらないことも復興進展の障害となっている。この点で、地方政治に強い党、地元の実状に詳しい党の必要性が高まっている。すぐにも実施される国政選挙に間に合わないことあることはない。

思い切った方策が必要だと思ふならば、「被災地から新たに発する党」の設立を考えてみてはどうだろうか。

ら遊離した政治状況が、被災地と被災者をいらだたせ続け、落胆させ続ける。いったい東北の政治家たちは何をしているのだろうか。所属政党の枠などさっさと越え、超党派で、東北の被災地と被災者へ「何とかする、しなければならぬ」という明確なメッセージを発するのが当然である。しかし、そうしたままとまった声は聞こえて来ない。発信しているのかもしれないが、聞こえなければ発信しないのと同じである。さらに、この状態を放置したまま、来年八月の衆議院議員の任

六日で、実に三六〇億円を越えた。この情熱のわずか一%としてもすごい金額になる。問題は、多くの人々の賛同と支援が受けられるかどうかにかかっている。

また最近のメディアでは、国政ばかりが取上げられているが、地方政治も非常に重要である。特に東北復興に関して、各地域の合意形成がなかなかまとまらないことも復興進展の障害となっている。この点で、地方政治に強い党、地元の実状に詳しい党の必要性が高まっている。すぐにも実施される国政選挙に間に合わないことあることはない。

政治家は何人いるか

次の選挙の目玉政策のひとつとして、衆議院議員定数削減問題がにぎやかだ。今度結党した「日本維新の会」が半減を掲げたが、実現性を危ぶむ声がある。しかし、政治家というものは衆議院議員だけではない。もちろん参議院議員もいる。それだけでなく、都道府県知事がいて、市区町村長がいる。さらに県議会議員がいて、市区町村議会議員がいる。これら政治家の総勢を知っている人は少ない。

衆議院議員は小選挙区が300人、比例代表が180人、合計480人、東北に限っては小選挙区が25人、比例代表東北ブロックは14人、参議院議員は三年ごとの改選分で、小選挙区が73人、比例代表が48人、東北に限っては小選挙区が8人、比例代表東北ブ

お金をかけない選挙とは?

検証することもなく、微塵も疑わずに思い込んでいたことを、はたからその間違いに気づかせることほどむずかしいものはない。あまりお金をかけない選挙というものがあるといことがそれである。

実際に選挙活動を行ったことがある人が書いた本を読んでみて分かったことだが、選挙に何度も出ている人でも、お金はかかるものかと思ひ込んでいて、アマチュアの目から見たら削減できる部分を削減することなく、全体的に選挙資金総額が大きく膨らむという構造になっているようだ。

削減できる部分として、まずは選挙活動を支える人たちの人件費がある。選挙期間中に雇用すれば当然人件費が発生する。しかし、みな「手弁当」で応援してくれるなら人件費は不要となる。そんな人材を普段から確保しておけば良いのだ。

それから、ポスターとか折込チラシである。これを見ている人はあまり多くはない。一方で制作経費は大きい。結果的に費用対効果は芳しくない。もっと効果のよいものに代えればよい。宣伝カーも高い。ああしたものは選挙風景として必要なかもしれないが、現代日本に合った安価でスマートな方式もあるはずだ。

最後はネットの活用による経費削減である。日本

はネット全盛の時代であるが、選挙では、時代錯誤とも思えるほど使用を制限されている。年令の比較的高い政治家がその必要性を感じないのである。若い新人政治家が簡単に参入できないようにガードしているのかと勘ぐりたくなるほどだ。法律で規制されている部分は別として、ネットをギリギリまで活用して選挙費用を削減する方法はいくらでもあると思う。

結果的に、現在必要だと思われている選挙費用の半分以下、いやもっと削減できる可能性がある。そうすれば、国政選挙、地方選挙問わず、軒並み費用の低コスト化が可能になり、あまりお金を持っていない人でも立候補できることになる。

ネットアンケートにご協力下さい

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

《東北復興を実現する政治家》を目指そう!

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

ネットアンケート調査にご協力ください。簡単な質問

**【東北・東京オリンピック2020】
のネット世論調査結果発表**

第3号の特集企画である【東北・東京オリンピック2020】についてのアンケートの回答者は11名と少ないのですが、初めて「ネット世論調査」として集計結果を発表できました。ご回答いただいたみなさまのご協力にあらためて感謝いたします。

11名のアンケートですが、もともと人数でご回答いただいた場合の傾向値とそう大差ないと考え、集計結果について考えてみたいと思います。

まず、共同開催については約2/3が賛成、次に共同開催の実現性に関しては意見が割れ、東北の意志次第というのが最も多く、次いで実現はむずかしいという意見が続く結果。共同開催で東北にもたらされるメリットは、十分にある、ある程度あるを合計すると、実に九割。東北にメリットがあるとの結果です。

共同開催で東北復興は進むかという問いに対しては、大いに進展するとあまり変わらないという意見に真つ二つに分かれました。共同開催によって東北の観光事業は発展するというのが全体の2/3となりました。

最後の質問である、共同開催によって福島放射能問題が進展するかという質問については、多少進展する

が最も多く四割強、ついであまり変わらないが続きました。

全体をまとめてみますと、共同開催はすべきだし、すれば東北の観光などにも効果があるが、実現はむずかしい。要は、東北のヤル気次第である。共同開催の復興進展への効果という面では、あるという意見とあまりないという意見に分かれました。福島の放射能問題は、根が深く、共同開催では効果もあまり期待できないということでした。

また、アンケートとは別に、【東北・東京オリンピック2020】の提言について外部にPRいたしました。

各大手新聞社、東北の主な新聞社、東北の各TV局、当然ながらオリンピック招致委員会、石原都知事、そして、東北の多くの政治家のみなさんが主な先です。

参考意見にさせてもらうという招致委員会の返事意外は具体的な反応はいまのところありません。しかし、これは機会あるごとに繰り返しPRしていきたいと考えています。

また、ぜひ東北の政治家の皆さんによる超党派の組織で、【東北・東京オリンピック2020】招致活動を展開して欲しいとも思います。

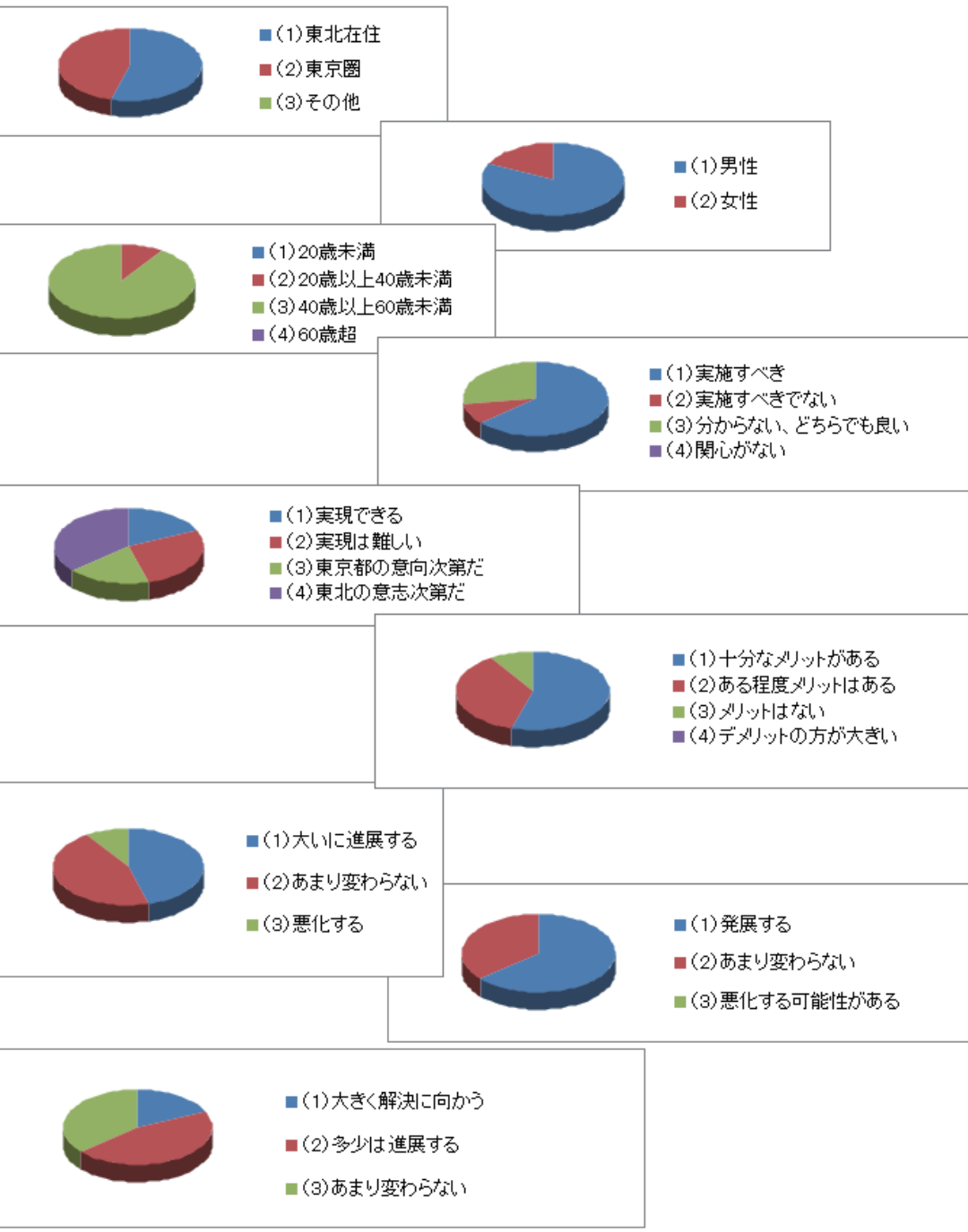
また、ぜひ東北の政治家の皆さんによる超党派の組織で、【東北・東京オリンピック2020】招致活動を展開して欲しいとも思います。

また、ぜひ東北の政治家の皆さんによる超党派の組織で、【東北・東京オリンピック2020】招致活動を展開して欲しいとも思います。

また、ぜひ東北の政治家の皆さんによる超党派の組織で、【東北・東京オリンピック2020】招致活動を展開して欲しいとも思います。

**第3号特集 【特集 東北-東京オリンピック2020開催の提案】についての
ネット世論調査結果発表**

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1)東北在住	6
	(2)東京圏	5
	(3)その他	0
②	性別	
	(1)男性	9
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	1
	(3)40歳以上60歳未満	10
④	共同開催を実施すべきか否か	
	(1)実施すべき	7
	(2)実施すべきでない	1
	(3)分からない、どちらでも良い	3
⑤	共同開催の実現性について	
	(1)実現できる	2
	(2)実現は難しい	3
	(3)東京都の意向次第だ	2
⑥	共同開催で東北にもたらされるメリットはあるか、ないか?	
	(1)十分なメリットがある	6
	(2)ある程度メリットはある	4
	(3)メリットはない	1
⑦	共同開催によって東北復興は進展するか、いなか?	
	(1)大いに進展する	5
	(2)あまり変わらない	5
	(3)悪化する	1
⑧	共同開催によって東北の観光産業はどうか?	
	(1)発展する	7
	(2)あまり変わらない	4
	(3)悪化する可能性がある	0
⑨	共同開催によって福島の放射能問題が進展するか、いなか?	
	(1)大きく解決に向かう	2
	(2)多少は進展する	5
	(3)あまり変わらない	4



【Tiny Log】
用途ご自由のまるいケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)

【Tiny Dice】
用途ご自由の四角いケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)

☆革物屋☆
かわもんや
<http://prewords.jp/>
E-Mail: contact@prewords.jp
TEL/FAX: 042(562)3507

Prewords
新聞創刊
ディスカウント
(20% OFF)

※カラー展開はそれぞれ5色
オレンジ:鮮やかな橙色、使い込んだ後の渋みが楽しみ
キャメル:5色の中で最もヴィンテージ感のある色合い
ブラック:スタンダードな黒、ビジネスにもプライベートにも
ワインレッド:落ち着きのある大人の赤
グリーン:深みのある優しい緑

【Handy Pouch】
モバイル機器収納など、用途は自由自在
革は薄めのやわらかいものを使用
手触り感を重視
サイズ:105mm(縦)×210mm(横)×60mm(奥行)
価格:7,800(税込み) ⇒ ¥6,240(税込み)

夏祭り再興プロジェクト

お祭から芽吹いた新たな地区のカたち

宮城県石巻市・牡鹿半島桃浦地区 大震災で3世帯4人にまで減少した 沿岸集落で夏祭りを盛大に開催



107本の鮮やかな自作ノボリ

津波で三世帯四人となつた漁村でなんと
しても！夏祭り

「なんとしても！桃浦の夏祭り」そんな力強いタイトルを冠された賑やかな夏祭りが、津波で甚大な被害を受けた宮城県石巻市の牡鹿半島に位置する港町、桃浦地区で開催された。夏祭りには、震災以前に桃浦地区に住んでいた人はもちろんのこと、わずかなつながらりをもとに関東近郊を中心に京都や福岡、そしてフランスからも参加者が集った。

企画したのは、去年の四月から一貫して桃浦地区で活動している「なんとしても！桃浦を担ぐ会」(以下、担ぐ会)。夏祭りに向

けて、地元の人と全国各地から駆けつけた大勢のスタッフが協働し、沿道や会場を彩る大量のノボリや大漁旗など港町ならではの豪快な装飾や、浜焼きの他たくさんさんの屋台を約二週間かけて準備したという。

当日は、同地区史上初めての打ち上げ花火や世界流しそうめん協会による流しそうめん、音楽ライブやお笑いライブなど盛りだくさんの内容に加え、プログラムには予定していなかった子どもたちと音楽家との合唱や老若男女での盆踊りが自発的に始まる等、桃浦地区は久しぶりの熱気に包まれた。

来場者からは早くも「来春の御神輿では特大のノボリを復活させて・・・」や「来年の夏祭りではど

ことコロナボして・・・」という声が聞かれるなど、前向きな気持ちを引き出し、たくさんの笑顔につつまれた夏祭りは大成功に終わった。

集落存続の危機にた たされた桃浦地区

今では三世帯四人を残すのみとなつてしまった桃浦地区も震災前には約六〇世帯一五〇人が暮らしていたという。数年後に予定されている高台移転計画に集落存続への望みを託すが、漁業関係者の減少や先の見えない暮らし、移転計画の遅れから元住民の反応は芳しくなく、その見通しは厳しい。

そんな中、今も桃浦地区に住み続ける女性は地区の

桃浦地区の存続を憂う声が地区内外から聞こえてくる中、夫婦で地区に残り石巻市の行政委員を務める甲谷強さんは生まれ育った故郷を愛し、その暮らしを次代に受け継いでいきたいと力強く語る。「桃浦は水産資源が豊富で畑仕事もできるので自給自足で暮らせる。また、海と山に囲まれ気候も穏やかで、ここでの暮らしを私自身とても気に入っている。そのため、これから震災以前に桃浦に住んでいた人だけで再生を図るという考えに固執せず、桃浦を気に入って移り住んでくる人も力を合わせて、これからの桃浦をつくっていききたい。せめて、自分が行政委員を務めている間に、地区のこれからについて目処だけでも立てたい。」

置かれた状況を説明すると共に将来への不安を口にす。桃浦は震災以前から、進学や漁業以外の就職に起因する若者離れやそれに伴う高齢化、人口減少が顕在化していた。震災がなくても、遅かれ早かれこうなることは予想していたけれど、ここまで急に進むとは・・・。高台移転計画で戻るといふ人の中にも高齢者が多く、このままではコミュニティの再生どころか地区そのものが成り立たなくなるかもしれない。そのとき、残された人たちの暮らしはどうなってしまうのか。」

お祭りから始まる 「これからの桃浦づくり」

甲谷強さんの想いに担ぐ会・代表の大島公司さんも賛同し、お祭りを企画したという。「現代の貨幣一辺倒の暮らしではなく、生活の根幹である食糧のことを自分で手に入れることによる感動や、暮らしの中で垣間見える助け合い文化など、自然や人との関わりの中で暮らしが成り立っていることを実感できる。そんな面白さが桃浦にはある。震災以前に桃浦に住んでいた人が戻ってくるのを目指すのではなく、地区の暮らしや風土文化に共鳴した人が集ま

つてくるような場を作ることが必要なのではないか。そこで、縁あって桃浦を知り、桃浦の人と出会い、桃浦という場を好きになった者のひとりとして、桃浦と一緒に楽しい時間を共有し、桃浦を知らない人にも地区をまるごと紹介したいと考え、お祭りを企画した。」

お祭りでは思いが通じ、これまで桃浦を訪れたことのない人も多数来場し、桃浦の人とのつながりだけではなく、桃浦を応援する人同士の新たなつながりもたくさん生まれたという。

大島さんは、これからの展望を明るく語る。「お祭り自体は点かもしれないし、そこで生まれたつながりも点にすぎないかもしれない。しかし、共鳴の中で生まれた点はいつしか線となり面となる可能性を秘めていると考えている。今後はさらに、ここで生まれた点をキッカケに、共鳴した仲間と桃浦でまた一緒にワクワクすることを企てたい。それが積み重ねることによって桃浦に人の循環が生まれ、桃浦との関太い縁につながり、それが起点となり「これからの桃浦」が自然発生的につくられていくのではないかと。」



トマトなど変わり種のかき氷も



お祭りに華を添える獅子ガール



世界流しそうめん協会も参戦



鮮やかに復活した獅子舞



自発的に始まった盆踊り

スコットランド・ウェールズ・コーンウォール・ブルターニュ：ケルト圏からの東北回帰

プロフィール

古山拓(ふるやまく) 岩手県出身・宮城県仙台市在住。水彩画家・イラストレーター。個展と広告イラストレーションの二本柱で活動。東北とケルトの地を描く事で独自のアイデンティティを模索中。

www.fermnet.co.jp/
furyama/
trumpet-tugboatsesae.net
facebook.com/yakufuryama



古川拓氏

惹かれる場所があるという

惹かれる場所があるというのは、当たり前のように見えて、考えてみると不思議な事だ。私の場合いくつかあるけれど、たとえば、エジンバラ。小学校三年か四年に読んだ本がきっかけだ。その本の題名は「おぼけのポロジャグチ」。兄妹とちやめつけあるおぼけの友情の話だったと思うが、内容はほとんど憶えていない。けれど、物語の中で舞台として描かれていた見知らぬエジンバラが、自分の中では妙にリアルだった。

私にとってそんな場所がほかにふたつある。フランスのモン・サン・ミッシェル寺院とイギリスのラズエンド岬だ。

モン・サン・ミッシェルとの出会いは、やはり小学校の頃。きっかけはNHKで放送されていた「未来への遺産」だ。その姿に釘付けとなり、中学時代、美術

のエッチングの授業ではその姿をモチーフに選んだ想い出がある。

もう一つは英国のランスエンド岬。実は私のアトリエの屋号はその名前を拝借しているのだが、一番最初に惹かれた決定的な理由が、いまとなつては曖昧で思い出せない。ではあるけれど、その岬はフリーランスとして看板掲げた私にとって、自ずと聖地となつた。

惹かれるのに理由なんて、ない。持つて生まれた自分のオリジナリティの中の欠けている、けれども大切なピースを補ってくれるものに出会った時、人は惹かれ、そして惚れるのだと思う。もともと、ちよつとしたピースの嵌め違いでそれが戦いになってしまいう事もあるけれど。

懐かしさの不思議

話をエジンバラにもどそ

う。ヨーロッパを長旅して二十二年ほど前のことだ。私を乗せた電車が、スコットランドエジンバラのウエバリー駅に滑り込んだ。リュックを背負い、プラットホームに降りる。その時思った。

「なんだか、すごく懐かしいな…」

初めて降りたホームだ。駅の外にも出ていない。そんな場所まで降りて湧いた懐かしい感覚。それは町を歩いていても不思議とついてまわった。そしてスコットランドをあとにし、ウェールズに足を踏み入れたときも同じような安堵感、懐かしさを憶える事になる。

そもそも「懐かしい」という感覚はなんなのか？突然やってくるその奇妙な感覚を私なりに解釈してみた。たぶんそれは、気温、湿度、匂い、音といった肌感覚が、もたらすものではないか。当然、刺激を受け

ケルト包囲網

て揺り起こされるベースになつてくるのは、自分が暮らしてきた場所と、体験してきた空気がたり、想い出の周辺記憶。肌にしみ込んだそれらの感覚が、ちよつとした刺激で胸の奥からにじみ出る。それが懐かしいという感覚ではないか。少年時代出会った「おぼけのポロジャグチ」や「モン・サン・ミッシェル」。そして一九歳まで過ごしてきた岩手、その後暮らしている宮城の空気感。そんな記憶の倉庫にしまひ込まれた原体験と旅先の空気の化学反応が、懐かしさの起爆装置となつていたのかも知れない。

スコットランド、ウェールズにたどり着く前、ヨーロッパに、イングランドにたくさんの町を回つていく。しかし、懐かしさを感じた場所は、ほかに思い当たらない。これもまた事実だ。(決して印象に残らないという意味ではない。どこもいいたい出をくれない。今はわずかにその残

香をヨーロッパの周辺に残すだけだ。ちなみにブリテン島にその香りが漂う場所が、スコットランド、ウェールズ、そしてコーンウォールの三エリアなのだ。ランスエンドへの旅をしているときは全く気がつかなくなつた事なのだが、自分が懐かしさを憶え惹かれる場所に、うっすらとオーバラップしていたケルトという言葉。はつとその事に気づき、自分の少年時代を振り返つた時、モン・サン・ミッシェルが私に語りかけた。

そして東北へ

ケルトの文化や歴史に引

つ張られていった先、思いがけず姿を現してきたものがある。それが実は自分が暮らす、東北だ。

ケルトの地の歴史は、いわゆる私たちが教えられてきた歴史の「陰」の部分だ。歴史は勝利したものの目線で書かれるのが常だ。東北もろくに抑圧され同化され、歴史の陰と大地の果てへと追いやられていったケルトの歴史と民は、どこか東北と通ずるものがある。ケルトの地で出



会った人々の気質もまた、東北人気質に重なつてしまうが、それは、朴訥かつ、頑固。人の気質は環境に左右されるとわたしは考える。厳しい自然の中で暮らす人々には、その地で生きるための気質が醸成される。食べ物が容易に手に入る環境に生きる人の気質とはあきらかに違つてくるのも当然だ。

ケルトの地に惹かれ遠くまで行つたはずなのに、その旅は、気がつく東北回帰への旅となつていった。いかえれば、自分のアイデンティティを探る事を、ヨーロッパの対局に残るケルトが橋渡ししてくれていたのだと、今は思う。

世界はこれからもっと狭くなる。ウエップではほとんど国境が取り払われた。そんな今だからこそ、自分が寄つて立つ地の存在は以前に増して大きい存在になつてはいないか。

アメリカ、インド、アフリカ、オーストラリア、ヨーロッパ……。どこであつてもいいのだと思う。自分がどこに、何に惹かれるか？心の耳を素直に澄まして、どこまでも向き合つてみる。すると異国の中に、生まれ育つた東北の真の姿が見えてくるような気がしてならない。

実は、わかつているつもりで理解できていないのが、自分の故郷ではないか。言い換えれば東北は己の「顔」であり、「自分の顔」はどんなことをしても見ることができないのと同じだ。顔を知らなければ鏡が必要となる。異国や異文化を鏡にする事で、東北を深く見る事ができるのではないか？

「君の住む大地に立つ旗は、どんな旗なのか？」

震災からの復興途上にある今、幾多の困難を乗り越え、気高く旗を掲げるケルトの地が、東北に生きる私にそう問いかけているように思えてならない。

志を持つ人の「新天地」としての東北

史上初の「快拳」に隣県の応援は当たり前前?

この稿が掲載された紙面が発行される頃にはもはや旧間に属することになってしまっていることだろうが、今年の全国高校野球選手権大会で青森の光星学院が昨年夏から春夏合わせて三度連続となる準優勝を成し遂げた。

「成し遂げた」と表現したが、もちろん選手、監督や関係者は、「準」の取れた「優勝」を郷里、そして東北にもたらしたかったに違いない。青森のみならず東北の高校野球関係者の間では「真紅の大優勝旗を『白河の関』を越えて持ち帰る」ことが大きな目標となっているからである。

とは言え、三度連続の準優勝は長い高校野球の歴史の中でも史上初の快拳である。選手達の大健闘を讃えたい。

さて、東北に住む人にとっては何より前すぎず誰も突っ込まないことで、他の地域から見ると「何ぞ?」と思われることが、実は高校野球についてはある。曰く「なぜ東北の他の県も応援するの?」である。上で「優勝」を「東北にもたらしたかった」と書いたが、これは意外に他の地域にしてみても、違和感とまではいかないようだが、「へえ」と思うことであるらしい。

そう、東北地方の住人は自分の県の高校だけではなく、東北の他の県の高校のことも当たり前のように応援するのだ。最近では東北の高校も強くなってきた、一回戦で全て姿を消すなどという事はなくなったが、寄ると触ると「あとどここの県が残ってる?」「どこそこの県は今年強いから何

とか優勝狙ってほしい」といった会話になるものである。東北勢同士が当たりものなら、我が身を引き裂かれる思い、とまでは言い過ぎだが、くじ運を恨みつつ、どちらを応援したらよいか真剣に悩む。

東北の人にとって、「甲子園」というのはそのようなものである。しかし一方、他の地域から見るとなぜ自分の県ではない高校をそこまで応援するのか分らないものであるらしい。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagama/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.otoyama

優勝旗は「白河の関」を越えたが...

このようになった一因には、ちょっと書いたように、かつて東北各県の高校が他地域に比べてお世辞にも強豪とは言えず、一回戦敗退が珍しくなかったということがあるのかもしれない。甲子園の楽しみがなくなってしまうという間に終わってしまったので、それを補うために隣県も応援するというようなことからこの「慣習」は始まったのかもしれない。

しかし、隣県と言っても、北海道はまず応援しないし、北関東の茨城・栃木・群馬も応援しない。新潟もこと高校野球に関しては積極的に応援してはいないように見える。あくまで東北六県の範囲内での応援なのである。

東北がかつてより負けなくなった昨今でも、東北六県の高校を互いに応援し合うという慣習は続いている。

ある。するとこれは、単に弱かったからというだけではない理由がそこにはあるのではないかと考えられるのである。

「白河の関」越えということ言えば、北海道で駒大苫小牧高校が優勝を果たしているのは、実は既に「白河の関」は越えているのであるが、「白河の関」を越えただけでなく、津軽海峡も越えてしまったので、東北の高校野球関係者としては目指していたことと少し違う。『白河の関』を越えてそこにとどまる、というのが新たな目標になったわけである。

この点を以ってしても、やはり北海道と東北は隣接地域ではあるものの異なる地域ということが分かる。

東北は「六つで一」

ではなぜ、東北の人たちは自分の県以外の県の高校も応援するのか。それはやはりこの東北地方が「一つの地域」としてのアイデンティティを有していることによるのではないかと、思うのである。

それぞれの市町村に属している、それぞれの県に属している、という意識の上に、東北に属している、という意識が、この地域に住んでいる人の中にはあるのではないかと、いうことである。これは大きなまとまりで地域を考える上ではとても重要なことである。「東北人」という言葉が

ある。日本の地方区分名「人」ということでウィキペディアに載っているのは、東北人だけである。「関西人」もあるではないかと意見があるかもしれないが、「関西」は大阪を中心とした京阪神地域とその周辺地域を概念的に表現した言葉である。地方区分名で言えばこの地域は「近畿地方」である。

考えてみれば、東北のよる内向きな地域というわけでもない。第二回で取り上げた奥州藤原氏は、遼ればすごいことのように思う。大ききで言えば中部地方が東北に匹敵する大ききを持つが、中部は北陸、甲信越、東海に分割されることが多く、同じ地域という印象が薄い。

近畿地方は学校教育では京都・大阪・兵庫・滋賀・奈良・和歌山・三重の二府五県を指すが、三重は東海地方に含まれることもある。逆に北陸地方の福井、中国地方の鳥取、四国地方の徳島などが近畿地方に含まれることもあり、実際に

は状況に応じて二府四県から二府八県にまで変化する。北海道はもちろん一体性を保っているが、それと同様に東北六県も「六つで一」という一体性を持っているように思うのである。

東北に住む人が「東北人」

かと言って、東北がそこに住む人だけで固まっている内向きな地域というわけでもない。第二回で取り上げた奥州藤原氏は、遼ればすごいことのように思う。大ききで言えば中部地方が東北に匹敵する大ききを持つが、中部は北陸、甲信越、東海に分割されることが多く、同じ地域という印象が薄い。

鎌倉幕府滅亡後に鎮守大將軍となつて東北に陸奥軍府を打ち立てた北畠顕家も中央の貴族である。もちろん、伊達政宗を始め、東北の多くの戦国大名も東北以外の出自である。

古来、東北は中央の政争で敗れた人が落ち延びる先でもあったし、罪人の流刑地でもあった。奥州藤原氏滅亡後に東北入りした武將たちは「新天地」を目の当たりにして胸を躍らせたことだったろう。東北には理由の如何を問わず様々な人がやってきた。東北の地に住む人はそうした人々を拒絶せず、同化し、力のあるリーダーであれば上に押し上げてきたのである。

「東北人」というのは必ずしも東北生まれの人だけを指すわけではない。かつて東北に住む人は中央から「蝦夷(えみし)」と呼ばれたが、それは決して特定の民族を指すのではなく、東北に住む人間を指す言葉であった。奥州藤原氏は先に書いたように土着の東北人ではなかったが、中央からは蝦夷扱いはされた。



東北の南端福島県白河市に残る白河の関跡

「よそ者・若者・ばか者」という言葉がある。地域活性化に必要な人材のことである。折しも東日本大震災からの復興支援に全国各地から支援の手を差し伸べていただいている。これまでの現地の既成概念、固定観念にとらわれない復興のために、まさに東北にこそ「よそ者・若者・

ばか者」の力が必要である。そして、東北に来て東北を支援してくれる「よそ者・若者・ばか者」も「東北人」である。そうした人々が東北の地で元からいる人と交流し、融合することで、新たな東北が生まれると確信する。

しかし、そうした「よそ者・若者・ばか者」の方々に伝えたいのは、決してボランティア的な目的で東北に来る必要はないということである。東日本大震災後の東北は、いわば今も「新天地」だからである。

一例を挙げる。原発事故問題に揺れる福島県内の医療状況はよくない。被曝を恐れ医師・看護師らが県外に逃れたからである。しかし、その一方で福島での勤務を希望して赴任する医師もいる。彼らは決して自己犠牲の精神で福島を目指すのではないそうである。

福島県内での勤務は、志のある医師にとつて実は非常にやりがいのある仕事なのだ。世界中から注目されている福島で診療活動を行い、丁寧なケアを積

み重ねていけば、被曝医療について間違いなく後世に素晴らしい成果を残せる、というのがその理由だそうである。

同様に津波で町が壊滅的な被害を受けた沿岸地域の復興はようやく緒に付いたばかりである。困難も多い。しかし、一から町を作り上げる場など、日本の他のどの地域にもない。これも他では決して得られない、やりがいと意義のある仕事である。

他地域から東北を目指す人にとつてだけではない。東北に住む我々にとつてもそれは同じことである。高校野球でよく言われる言葉がある。「ピンチの後にチャンスあり」。今の東北はまさにそれである。住んでいる地域を問わず、志を持ち、その実現を図りたい人にとつて、東北の大地は昔も今も、大いに魅力ある場所だと言えるのである。

「よそ者・若者・ばか者」という言葉がある。地域活性化に必要な人材のことである。折しも東日本大震災からの復興支援に全国各地から支援の手を差し伸べていただいている。これまでの現地の既成概念、固定観念にとらわれない復興のために、まさに東北にこそ「よそ者・若者・

「よそ者・若者・ばか者」という言葉がある。地域活性化に必要な人材のことである。折しも東日本大震災からの復興支援に全国各地から支援の手を差し伸べていただいている。これまでの現地の既成概念、固定観念にとらわれない復興のために、まさに東北にこそ「よそ者・若者・



中世の館跡の周囲には空堀の跡などが今も残る

『東北移民』随想

志高きこの誌面を借りて、突如自分の趣味の話というのも恐縮だが、今回は私が仙台の町の片隅で弾いている、バイオリンの話から始めてみたい。

バイオリンという日本ではとなく高尚なものに捉えられがちだが、実は私は二十一歳の時初めてこの楽器を持ち、三十八歳で人前で弾くために練習を始めた。楽譜はほとんど読めず、誰かが弾いた曲やCDの曲を聴きながら弾く所謂「耳コピ」のみ。先生にもついておらず、正直、ヘタクンを自負している。



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

器を手になかったらどう。私が弾いているのは、アイルランドの伝統音楽である。「隣国」スコットランドなど周辺の所謂「ケルト文化圏」の音楽も含まれるが、アイルランドにはこれら地方の音楽文化を代表する、際立った性格がある。町のあちこちにある、居酒屋というより交流の場である「パブ(Pub)あるいは「c house)」や家庭内にて、特にプロの音楽家でもない一般人たちが、仕事を終えそれぞれ楽器や歌、ダンスを持ち寄って楽しく過ごす。その中でバイオリンですら特別の楽器ではない。「フィドル(弦を弓で擦る楽器、の意味)」と呼ばれる、小型のハープや木製のフルート、ギター、アコーディオンなど様々な楽器と対等にセッションを繰り返す。アイルランド音楽は生活人の音楽であり、伝統とはいえ若者たちにも見直され、新しく生まれ続けている。「現在の」音楽でもあるのだ。

何故、アイルランドの音楽などを、日本の、それも大都市の人間がやっているのかと、正直珍しがられるのが現状だが、この質問は何故ジャズを、ロックを、日本人がやるのかというのと全く同じで、ナンセンスだ。その音楽ジャンルを好

きになるのに、人はいろいろと理由をつけたがるが、それは不要である。とは言え、もともと私の「フィドル」としてのバイオリンへの憧れが、中学生の頃アメリカのカントリー、ブルースといたった音楽への嗜好に始まった事は、偶然と思えないものがある。と言うのも、これらアメリカの旧き良き音楽は、そのルーツの主幹をアイルランドに持っていたからだ。

私は映画でも、日本の時代劇よりアメリカの西部劇が好きだったのだが、これは西洋趣味というよりは、その果てしない西部への旅、「さすらい」の要素に惹かれていたのだと思う。西部劇の名作『シェーン』の主人公であるさすらいのガンマンがアイルランドからの移民であった事にも象徴されるように、アメリカはアイルランドでの苦難の生活を逃れて渡ってきた人々が群を抜き多かつた国で、現在のアイルランド本

国の人口四百万人に対しアイルランド系アメリカ人は三千万人。西の果ての映画郷・ハリウッドでは古くはジョン・フォードやウォルト・ディズニー、現代ならメル・ギブソン、クリント・イーストウッド、ジェームズ・キャメロンなど圧倒的な影響力を持つアイルランド系の人材が絶える事は無いし、二十世紀前半のアメリカの陰には、この膨大なアイルランド系住民も含め同じ反英感情の塊であった、超大国アメリカの支えがあったと言われている。

さて、アイルランド移民が生んだアメリカのカントリー音楽に憧れる中学生の私もまた、東北からの脱出を夢見る、移民予備軍なのであった。私が生まれ育った山形県海沿いの町は、バイオリンを弾くなど普通は考えられないような、「何もない田舎」だった。実はもともとそうだったのではなく、私の親の世代まではオーケストラの部活動もあつたという。それが、戦後の東京一極集中の流れで急速に衰退、何かがしたいと思つたら、遠い都会へ出て行くしかないという、郷土の過疎への悪循環の中に私は巻き込まれ、また加担していった。

東北の人々の「移民」の歴史もまた、長い。というより、東北は「移民の国」そのものと言ってもいいかも知れない。古くは縄文時代から大陸や西日本からの人々の流入出があり、「蝦夷」を攻略した大和政権による東北から各地方への大量強制移住もあつた。しかし現代の東北人の記憶にも無縁ではない「移民」の事実として、「明治維新」、そして第二次世界大戦後の「集団就職」に象徴される、極端な中央集権化による首都一極集中の流れがあり、これは全国的なものとは言え、特に維新時代の戊辰戦争後、徹底的に不利な立場に貶められた東北にとつては状況は深刻で、切実であつた。彼らは労働力として、西日本の新政府側が作つた体制の下、東京を支え実際の町を作り上げる役割を担つたと言え

表している、と言える。見方次第では、当時考えられる限りの生活水準、情報環境を求めて漕ぎ出している、欲求に素直で健全な家系と言えようか(笑)。そして私もまた、当然の事のように東京を目指したのである。

ところで、東京に出た後の私は、アイルランド音楽を知ると引き換えに、アメリカの音楽への興味の方向は下火になってしまった。これについても理由付けは愚かしい事と思いつながら、自分自身の中での旅路の果てである東京への幻滅、その逆を生じてきた、捨ててきた郷土・東北への関心と、その流れは同期していたように思えてならない。

東京で楽器を入手した頃、レコード店に音源は豊富だったが、周囲にアイルランド音楽の同好の士はほとんど見当たらず、アイルランド音楽というものは東京にやとちらほら出店し始めた時代で、店内で演奏があつたとしてもプロばかりで近寄りたく(爆)元来アンテナも鈍い田舎者の私は何ら情報を掴む事ができなかつた。そのまま十年以上、楽器も部屋で埃を被るような事が多かつたのだが、三十代も半ばで地方都市・仙台に移住した後、思いもかけない事が起きた。岩手県でアイルランド音楽の活動をしている演奏家夫婦「TRAD」が情報を発



私の一族を見て、庄内の叔父・叔母つまり父の弟妹たち全員が首都圏に移住しているし、母は東京出身だが母方の祖父も母もともと庄内出身なので、まさに血族身を以って圧倒的な東京の吸引力を

信じており、彼らと交流を持った事で仙台にもアイルランド音楽のサークルがあり、しかも市内のアイリッシュパブでセッションまでしている事を知るのである。仙台には全国から様々なジャンルの演奏家が集まる音楽祭があり、こうした場で私は改めて、東京のアイルランド音楽の演奏家たちの存在を知り、出会う事ができたのである。実際、当然の事ながら首都圏の方が演奏家の人材は圧倒的に豊富で、日々セッションで鍛えられているため強者揃いである。しかし、あいにく彼らもおそらくは私と同じ時代にアイルランド音楽を知り、少しずつ育つてきたのであつて、私は東京にいた間は彼らに出会う事ができなかつたのだ。どうも、東京という巨大都市と私は、相性がイマイチというか、タイミングが合わないもまた、私にある確信めいたものを抱かせる契機となつた。東京にいかん情報や人材が集まっているからといって、そこに身を置けば出会えたり、恩恵を受けられたりするとは限らないのであり、例えば東北人ならば、東北人としての「東京」の出会い方があるのではないかと、という事である。

もちろん、これはどこまでも個人の資質や巡り合わせによるだろうし、インタ

インターネットなど情報網が発達した現代だからこそ言える事かも知れない。アイルランド人の多くがアメリカなどに渡つた事で成功し繁栄するのと同様、東京に出るからこそ成功し幸福を得る東北人は存在し、むしろ主流であり続けるだろう。ただ、私の世代から徐々に、東京との関わり方が変わりつつある事も、自分自身や周囲の事で実感するの確かだ。私の兄と姉は東京を少しも見ず、兄は北の都・札幌に活路を見出した。私もかつて兄を頼つてこの町に住んだ事でその後の価値観に影響を受けているし、今は一家の視点が東京方面よりは北方へ向いているように思う。単に一族の一例に過ぎないが、長年に渡り東京と深く関わつてきた一族にとつては、革命的にすら感じられる事なのだ。今、地域が「ミニ東京化」というネガティブ面を超えて各々の地元本来の魅力に目覚め、影響し合つている事に「移民」たちは気づき、それぞれに動き出して多様化しつつあるのではないかと、そんな風にも思える。

ところで、アメリカに渡つてもアイルランド人は子孫に至るまでアイリッシュ・ユルーツを誇りにしているのに対して、東京に出た東北人の多くは「三世代経るとほとんど東北を顧みない気がするのが、寂しいところだ。それは首都圏に

住む私の従兄弟たちを見て思う事なのだが、一方で昨年の震災の際には、一、二世代前に東北にルーツを持つという首都圏の人が、現地にボランティア活動に向かう、という話も聞いた。「誇り」など敢えて拵えずとも、彼らの心にはしっかりと東北が生きているのかも知れない。けれども、私たち現代の東北人は彼らの心に常にあるべき「東北」を新たに作つていかねばならない。そうも考えるのだ。

因みに、私の通つた鶴岡市立加茂中学校は、とつくと昔に閉校し、山中で廃墟化したのが、現在庄内地方で興されている映画制作事業で、スタジオとして使用されている、という話だ。この映画事業は、現在は東京の撮影隊に口ケ地やエキストラを貸しているに過ぎないが、今後プロデューサーや脚本家、俳優、技術者を育てて地元独立産業として発展できるか、が課題である。それができなければ、いざれ東京の映画業者に飽きられて終わり、結局は過疎化、廃墟化が極まるだけである。

人が夢を持つ事に終わりはなく、「移民」はいつの時代にも現れ続けるに違いないが、「ここには何も無い。大都会に出るしかない」という、哀しい移民の時代だけは、そろそろ終わりにしようじゃないか。そうも言つてみたいのだ。

住む私の従兄弟たちを見て思う事なのだが、一方で昨年の震災の際には、一、二世代前に東北にルーツを持つという首都圏の人が、現地にボランティア活動に向かう、という話も聞いた。「誇り」など敢えて拵えずとも、彼らの心にはしっかりと東北が生きているのかも知れない。けれども、私たち現代の東北人は彼らの心に常にあるべき「東北」を新たに作つていかねばならない。そうも考えるのだ。

いま大震災について思うこと

東北復興の記事を書く事に戸惑いを感じています。この未曾有の大災害に遭遇し、被災され、家や仕事を失われた方、ましてや新しい家族親族を無くし、未だに自分を責め、後悔の念を持たれている多くの人達が居られる事実を知り、被害に逢わなかった私には、あまりにも重すぎる問題であり軽々しく書けるテーマではないと思われるからです。

昨年、気仙沼を訪問しました。案内の観光課の方が言われた「この風景を忘れないで欲しい。風化させたくない」という言葉を思い出し、勇気をもって書く事にしました。

一、風化させない事

被災された惨状に息をのみました。言葉が生まれません。巨大な第一八共栄丸が、一キロ近くの内陸で船体を晒しています。その先は、廃墟の高い建物が、ポツン

執筆者紹介

YASUYUKIは、世界中を旅してきました。彼は、世界のひととすぐ友達になる不思議な能力を持っています。彼の略歴は、下記に書かれています。何の意味もありません。何故なら、彼は、未来に飛んでいく人だからです。



YASUYUKI氏

経歴

一九四六年生 出身奈良県
一九七〇年 メーカーに入社
二〇〇六年 メーカーを定年退社
旅行作家・旅行コンサルタント
(社団法人日本旅行作家協会会員)
ファイナンシャルプランナー

とあり、海岸まで家の土台を残した荒地が続いています。夏の雑草が風に揺れて「たたく」という言葉を思い出し、勇気をもって書く事にしました。

津波に押し流されて、土地が一メートルも低くなつたこと。その為、高潮が今も市内の家々に流れ込んでくる事。

三月十一日当日は、魚市場の建物の屋上から車や家、そして多くの人が、押し流されていくのを、ただ見ているだけしか無かった切なさ、津波は、何回も押し寄せ、津波は、何回も押し寄せ、飲み込まれる心持がしなかつた事。

津波の後で、プロパンガスの爆発があり、彼方此方で火災が発生し、結果的に死者が千人強出た事、人口は、七万五千から三万人に減少し今も戻らない事、それでも気仙沼は高台が近く、多くの住民がそこに逃げて難を逃れ、人口に占める死者の数は少ないほうで、周辺の市町村はもつと悲惨な状況であることなどを話されました。

昨年の三月十一日から一年半近くが経過しているにも関わらず、その話の光景が、頭に浮かびます。現場で体験をした方に話して

いただくことで実感をもつて、こみ上げるものがあります。しかし、人は、すぐ忘れず。

二〇一二年、訪れたボスニアヘルツェゴビナは、二〇年前民族統一の祭典として冬のオリンピックを實施しました。(当時の国名はユーゴスラビア)その後、民族紛争が勃発し、隣人同士の血を流す銃撃戦が繰り返されました。サラエボは、周りをセルビア軍に包囲され幾人もの人が銃弾の犠牲になりました。俗にいうサラエボの悲劇です。しかし、現在のサラエボは何事もなかったのかのようになつていて、若い人が現代的な街を歩いている。想像を絶する悲劇を体験した人の思いは重いものです。悪夢は、心の奥底に秘められています。しかし、二〇年過ぎると実体験がない人が、成人になります。

人は、強烈な体験は、頭でなく体で記憶します。その経験の差は大きく簡単に埋めきれぬものではあります。あのアウシュビッツのホロコーストを経験したイスラエルの人達が、パレスチナの人々に行っている行為は、あの体験を忘れたかのようです。

気仙沼を去る時、地方紙が纏めた災害の写真と証言集を買いました。この内容は貴重な物であり、後世に伝えていく内容が多くあると思います。と同時に

絶望的な悲しみは、ある程度の時間の経過とともに、心の奥により深く澱のように沈殿し、容易に表には出てきません。先日の全国紙に、沖縄の「集団自決」の証言の話が掲載されています。詳細を聞き出すまでに七年かかったが、納得できなかつたとある。自然災害と戦争の記憶とは一律にできない面もありますが、悲惨な状況を正確に掘り起すのは容易な事ではないでしょう。

この大災害を語り継ぎ、同様の被害をもたらさないようにする努力が必要で、今までも多くの悲惨な体験がありました。太平洋戦争の原爆、沖縄、広島長崎の公害問題、日航ジャンボのような航空機事故や企業災害、これらの問題は、多くは国が被告となり、裁判所も問題をあいまいにした判決に終始し、大切な真実を国民の前に明らかにすることはありませんでした。逆に志ある人により、真実が見えてきたといつていいでしょう。今回の東日本大震災は福島原発問題を抱えています。原発の有無の議論の中にすべての事実が風化していく事を懸念します。過去の歴史は、国に多大な期待をする事は出来ない事を示しています。

幸いな事に、地方紙の努力や、東北を愛し真実を知りたい志ある人が多くいます。ソーシャルネットワ

多くの国を旅してきました。外国の多様な文化に触れ人生を豊かにしたく始めました。

二、地方の文化の独自性と重要性

一般に私達は、国連に加盟している、オリンピックの出場国等の現時点の国家で国という括りを考えます。しかし、年代が違えば、国の括りも相違します。ちなみに、今の中学生にソ連という国は存在しませんし、ユーゴスラビアも知らないでしょう。時の流れは国の在りようを大きく変えます。連綿と続く歴史の流れの中で現在の国があります。いわば、現在の国も歴史の一通過点に過ぎないのです。

国が亡びると地方もなくなると思われがちです。しかし、物事は逆で、地方があつて国があるのが通例です。時の為政者は、征服するとその国の固有の文化(言語を含めて)を破壊し、自分たちの文化を押し付けるのが世の常です。チェコスロバキアは、今は、チェ

コとスロバキアに分かれましたが、両国ともドイツに征服されドイツ語を強要された長い時期がありました。チェコ語が生き延びたのは、庶民が愛した地方周りのマリオンネットの劇で使われていた為です。チェコの人達がマリオンネットを国の財産として大切にすることで、言語を含めたチェコの文化芸術を守り抜き、現在のチェコという国が存在しているのです。このような例は、世界中で枚挙にいとまがありません。国の基礎には、夫々の文化があるのです。

明治以降、日本は、中央集権制度を整える為、廃藩置県を実施しました。多分、当時の国の括りは、廃止されたその藩だったのでしよう。日本人が日本という国の概念を持つようになったのは、日清・日露の戦争前後からです。しかし、その当時は、まだ、地方独自の文化芸術が、沢山残されていたことでしょう。郷土を愛した宮沢賢治は、岩手モトチーフに多くの作品を残しました。啄木は、「故郷の山に向かい言う事なきかな」と詠いました。

今、東京横浜圏の人口は、一二〇〇万強です。九位に関西圏が入ります。二位にニューヨークが入っています。パリは、二〇〇万人です。そして、各地に中核の地方都市があり、その地方独自の文化を持ち、その文化に誇りを持ち、そしてその土地で働き、子供を育て、地方の文化を次世代に伝承していきます。頑固なまでにこだわります。

翻つて日本の地方は、多くの人は、郷土を愛する気持ちを持ちながらも、人口の衰退から文化を守る担い手を失い、東北を含め

限界集落という過疎地を抱えて疲弊しているのが実態です。

今、地方の時代と言われています。しかし、東北の国土は、大震災の影響もあり、荒廃し、いつ復興できるか見通しさえ立たない状況です。それでも、私たちの祖先は、同様の苦難を乗り越えてきた歴史を持っています。東北(一律に東北と言っているのではありません)には、独自の文化伝統があり、その中にこそ新しい復興の為の創造力が秘められているはずで、寡黙だけれど根強い力と独特のユーモアのセンスを秘めた東北の人々が、新たに再生しないわけがありません。破壊は、創造を生み出します。それぞれの方言で政治・経済・教育等身近な問題から自己の主張を物申し実行する。中央からの画一的な援助でなく、自らの手で中央を凌駕する復興こそ、独立という名に相応しいものと思えます。ロシアの農民詩人エセーニンは、「天国はいらぬ。故郷が欲しい」と当時のソ連の社会主義化を痛烈に批判しました。世界の歴史は、紆余曲折を経ながらも、郷土を愛する人々の手により復興してきた道筋を辿ってきているのです。

今回の大震災で被災された方のご冥福を心からお祈り申し上げます。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

笑い仏 福島への行脚 第二回

●はじめに

あっちへ行ったり、こ
っちに来たり。

東日本大震災後の被害
と闘う福島を目指す「笑い
仏」は、今年六月一日に、
生まれた鳥取県倉吉市を出
発し、みなさまの善意と共
に色々なお寺を行脚してい
ます。この連載では、そん
な道中での出来事などを、
お供するMONKフォーラ
ムの代表がつづります。

●同じ被災地として

八月一日現在、「笑い
仏」は神戸市灘区の摩耶山
にある天上寺の本堂に逗留
しています。ブツダの母君
である摩耶夫人をまつるこ
とで知られるこの山寺に
は、東北と同じく震災の記
憶が深く刻まれています。
そう、一九九五年の阪神淡
路大震災です。この地震は、
天上寺も含めて神戸全域に
甚大な被害をもたらしまし
た。



あちこちのお寺に逗留しながら、福島を目指す笑い仏



摩耶山から見下ろすいまの神戸港

お寺への参拝には摩耶
ケープルとロープウェイを
使うのですが、落石のため
全て運休。天上寺は山上に
取り残されることになるの
です。復旧したのは実に五
年後。それまで、色々なご
苦労があったといえます。

しかし、当時を振り返る伊
藤住職の口からは、感謝の
言葉のみがあふれ出ます。
自分の身さえまならぬ
方々が、「大丈夫ですか？」
と、助けの手を差し伸べ
てくれたそうです。

被災者の皆さんにいつ
も住職は励まされたとい
います。そこで、「仏教者
として、今度は私が皆さん
のために何かできないか？」
と、仮設住宅の訪問を思い
立ちます。プレハブに身を
寄せていた方は、日が経つ
につれ心身ともに疲れ、外

に出ることもなく過ごす
ことが多かった。訪問し始
めたころは、「坊主が何しに
くるん！？わしらの葬儀
が目的か！」と罵倒された
こともあったそうです。し
かし、住職は諦めず、忍耐
強く訪問を続けました。

「お日さんが照っている
のだから、とりあえず外に
出て、体を動かさません
か？」

絶望にうちひしがれた
方々は、体を少し動かすの
さえ辛い。それは承知の上
での行動です。数日が経つ
と、まずは子供が住職の後
に続いたそうです。そして
次にご老人が。最後には、
かつて罵倒した方もその輪
に加わりました。

「よっこいしょー！」「
よっこいしょー！」

両手を青空に思い切り
突き上げます。別段変わっ
たこともなかったのです
が、この「よっこいしょー
体操」が仮設住宅で広がっ
ていきます。同時に、少し
ずつ笑顔の輪も広がって
きました。ただ、このとき

も住職がおっしゃるのは、
「力をいただきたいんや」と
いうことです。何かをした
のではなくて、後から振り
返ると、生きる力をこちら
が教えてもらったのだ、と。

ただきました。このお寺は
花の寺として名高いのです
が、住職は説法をする際に
は、「この『笑い仏』を拝
んでいただき、東北に思い
をはせていただければ…」
と、いつも話して下さって
います。

●心をひとつに

笑い仏さんが逗留する
予定のお寺に関して、もう
一つお話をしましょう。八
月二七日からは、現在NH
K大河ドラマで放映されて
いる平清盛が出家した寺で
ある神戸市内の能福寺にし
ばらく居候させていただきました。
行くと一目でわかる

造られました。「初代」と
いったのは、一度消えてな
くなつたからです。でも、
そのときは震災が理由では
ありませんでした。人災の
最たるもの、「戦争」です。

太平洋戦争のおり、金
属回収令で、一九四四(昭
和一九)年に大仏が取り壊
されました。神戸を訪れた
外国人にとつての名所であ
り、市民の誇りでもあった
大仏が、無残に解体されま
した。しかも、人を殺める
武器を作るために。だが、
わが国は戦争に敗れ、焼け
跡だけが神戸のまちに残り
ました。

ときは流れて、一九九〇
(平成三)年。もう戦時・
戦後の貧困はどこにも見当
たりません。物質経済が頂
点を極め、ころころ取り残
されつつあったバブル期で
す。神戸市民の要望で、か
つての神戸の誇りだった大
仏を復活させようという運
動が起こります。

実はこの運動、最初は
冗談から始まったそうで
す。それが、すぐに実行委
員会が組織され、広く告知
するために発泡スチロール
で原寸の大仏をつくり、そ
れを神戸パレードで進行さ
せました。小さな声があ
つという間に大きな声とな
り、「気がつけば大仏がで
きてたわ！」と雲井住職は
大笑いします。まあ、「気
がつけば」というのは少し
大げさで、そこには大変な
ご苦労があったと思いま
す。しかし、がむしやりに
事に当たり、周囲もそれに
協力した。その証しが、戦
争に壊されても不死鳥のご
とく復活した兵庫大仏なの
です。仏さんは今も、人々
に温かいまなざしを向け
ています。

最後に、われわれMO
NKフォーラムの活動で知
り合つたお坊さんのお話で

●福島と和歌山

和歌山県の田辺地方に
は、実は福島よりずっと以
前に、原発誘致の話があつ
たそうです。昭和四〇年代
のことです。集落は賛成
と反対で骨肉の争いとな
り、ついに推進派が断念し
ました。反対派の主張は明
確でした。「歴史では何度

筆をおきましょう。この方
は、ドキュメンタリー映画
『GATE』に出演された
和歌山県田辺市の僧侶、宮
本師です。映画の内容は、
今も福岡県八女市星野村に
残る広島県の「原爆の火」を、
地球で最初に核実験が行わ
れた米国のネバダ砂漠にあ
る「トリニティーサイト」
に返すというもの。彼はそ
の火をランタンに入れ、米
国を二五〇〇キロ(一)に
わたり行脚するのです(再
度断つておきますが実話で
す)。最近、久しぶりに会
つた宮本師に、「笑い仏」
の話をしました。すると、
地元の和歌山のことを教え
てくれたのです。

当然、原発の建設と運
営に関わる多額の補助金は
一切おられない。和歌山には
目立った産業も育たず、当
時は全国で見られたいわゆ
る「経済発展」からひとり
取り残されることになりま
した。

津波などの自然災害を、
未然に防ぐことはできませ
ん。原発設立には当然その
ことも考慮しなければなり
ません。そして、もちろ
ん、未来に生きる人々のこ
とも。和歌山と福島現状
は、大いなる教訓を我々に
与えます。

「でもね…」と宮本先生
は続けます。「我々はいま
も安全を手にかけています。
私は、その決断をしてくれ
た先輩に感謝します。」

本プロジェクトにご賛
同いただけるかたで、お心
添えをしていただけるかた
がありましたら、幸いです。

自主上映ドキュメンタリーフィルム「Gate」



空を背景に優しく見守る兵庫大仏さん



自主上映ドキュメンタリーフィルム「Gate」

長谷川 稔
MONKフォーラム共同代表

三陸の牡蠣生産者を応援する 「オイスター・フェスティバル in TOKYO」取材の記 2012.9.9 於：東京タワー

被災した三陸の牡蠣生産者を応援するために、「牡蠣の早むき選手権」が九月九日、東京タワーで開催された。この大会の優勝者は、アイルランドで開催される「Galway International Oyster Festival」という由緒ある大会に日本代表選手として招待されることになっている。そのため駐日アイルランド大使、ジョン・ニアリー氏も出席された。



駐日アイルランド大使

被災した三陸の牡蠣生産者を応援するために、「牡蠣の早むき選手権」が九月九日、東京タワーで開催された。この大会の優勝者は、アイルランドで開催される「Galway International Oyster Festival」という由緒ある大会に日本代表選手として招待されることになっている。そのため駐日アイルランド大使、ジョン・ニアリー氏も出席された。



表彰式

二位は石巻市の生産者の後藤氏、三位も石巻市の生産者の阿部氏であった。上位一〇名にはやはりオイスターバー店員が多く、六名だった。とはいえ、二位と三位はほとんどに惜しかったといえる。優勝者にひけを取らない戦いぶりであった。けつして当新聞のひいきのひき倒しではない。

東京開催でこれだけ盛り上がるのであれば、もしこの大会が三陸の牡蠣生産地の只中で開催されたならば、さらにどんなにか盛り上がるのだらう。東京まで来ることができない三陸の牡蠣生産者たちがどれほど応援に駆けつけるのだらう。その他の被災者も応援に駆けつけるのだらう。大会会場もつと大きな場所にならないと収容できないのだらう。震災以来、内へ内へともりがちだったエネルギーを外に発散する機会を奪われてきた被災者たちに、心底からのストレス発散の機会を提供することだらう。各地区の大漁旗が打ち振られ、壮大な応援風景が見られることだらう。そうしたことが、今後の被災地復興にとつてどんなにか役立つことだらう。そう思っ

たのは筆者だけではないはずである。

現に、この大会参加者は、昨年の大震災以来始めて遠出した人が多いと聞いた。マスメディア報道が減少していることで、きつと復興に向かっているのだらうと思ひ込みがちだが、まだまだ三陸は被災中なのである。競技者の元気の良さや応援団の勢いで、いままも三陸の牡蠣生産地が被災の現実のなかで苦しんでいることを忘れてしまひそうになるが、けつしてそうではないのだ。

生産は落ち込んだままであり、消費も伸びない。養殖業者の生活にはまだ未来が見えてこないのだ。これから秋となり、いよいよ養殖牡蠣の水揚げが開始され、牡蠣シーズン本番を迎える。今年の牡蠣は生育状況が良いそうである。その牡蠣を食べるに、日本中、いや世界中の牡蠣愛好者を三陸に集める。そして一大イベントとして、「牡蠣の早むき選手権大会」を三陸で開催する。準備が大変なので来年まで待たないと無理だと言わずに、ぜひ今年中に、いや少なくとも来年はじめまでの今シーズン中に開催し、三陸の元気な姿を国の内外に見せ、なおかつまだ復興途上にあることも広く知らせることは意義があると思う。

そこで当新聞から、民間スポンサーを見つけ、東北で、今シーズン中に、「牡蠣早むき選手権」を開催することを提案したい。民間スポンサーは、昨年の震災直後のような見返りのない支援金ではなく、きちんと

ビジネスとして成り立つ「投資」をしてもらい、この大会を運営してもらおうこと。そして、今後も継続してもらおうこと。単なる義援金であつて、ビジネスとして成立しなければ、単発企画として終わり、長続きしないからである。

他方、三陸の牡蠣生産者は牡蠣流通業者と共同で、この大会を契機に、三陸の牡蠣を「日本で一番の牡蠣」に押し上げること、さらに世界に三陸牡蠣をPRすること。そして、これまで誰も考えなかった、三陸の牡蠣を世界に輸出すること。

そして、このコラボレーションにより、関係者全員が大きなメリットを享受する。そんな企画を提案したいと思う。

このプロジェクト成功のあかつきには、このビジネスモデルが、他の被災地産業の先行モデルとなり、東北復興の迅速化に大いに貢献することを心から願っている。

先月八月はとも忙しかった。もともと当新聞を毎号発行するにあたっては、基本的にお休みのないものがない。極論すれば毎日が締め切り状態。企画、企画変更と調整、取材、写真や動画の編集、原稿依頼、自らの原稿執筆、レイアウト作成、校正に日々追われる。

それに加え、スタッフの退職に伴う業務の変更、外部スタッフへの業務委託、そして会社の税務申告と通常にはない業務が続いた。お盆であちらこちらに出かけなければならぬ。本業を他に抱えての新聞発行なので、土日はもちろん、ウィークデーの夜から深夜にかけて時間を確保しなければならぬ。今年の夏のあまりの暑さでかなり体力が弱っているところに、こうした仕事を立て込み、本当に参ってしまった。睡眠時間も満足に確保できず、体調不良にもなった。本当にしんどかった。まさに試練の時であった。

しかし何とか乗り切った。三号という節目も乗り越えた。ネット世論調査結果も出すことができた。記事執筆陣の裾野拡大もできつつある。何事にも試練がある。そうした試練も楽しみつつ新聞発行を続けたい。単なる義務感からは良い新聞はできないと思うこの頃である。

編集後記

先月八月はとも忙しかった。もともと当新聞を毎号発行するにあたっては、基本的にお休みのないものがない。極論すれば毎日が締め切り状態。企画、企画変更と調整、取材、写真や動画の編集、原稿依頼、自らの原稿執筆、レイアウト作成、校正に日々追われる。

『東北独立』 砂越豊 著
価格：1,260 (税込み)

『立ち上られ、オジサン!』 砂越豊 著
『もうひとつの構造改革』 砂越豊 著

※電子新聞創刊特別値引
上記2冊ともに 1260円⇒500円(税込)
遊無有出版 検索